



母よ、

障害者の

「まゆ」を紡ぐな

株式会社ダックス四国
代表取締役社長 且田久雄さん

蚕は、まゆを自分でつくり、自分で破って世に出る。

障害者のまゆは、親がつくる。

大人になっても、支援者といっしょに

いつまでもつくり続ける。

そんな過保護のまゆを、障害者といっしょに破る。

ダックス四国の社長・且田久雄さんの思いは、

その一点だ。

実践で鍛えられた話を聞こう。

編集部=文
text by Kotonone
岸本 剛=写真
photograph by Tsuyoshi Kishimoto



日本一、障害者雇用率一六％強

まず、工場を見学すべきだったな。且田さんに取材しながら、何度も思った。「ここまで来てんから、まず、障害者の働く姿を見てきたら…」と、且田さんのニコニコ顔がずっと語っているようだった。

株式会社ダックス四国は、簡易食品トレイ・食品容器製造・販売の最大手、株式会社エフピコの特例子会社。エフピコは、三年連続、日本企業の障害者雇用率一位に輝いた。ダントツの一六・三二％（二〇一三年度）。雇用実

数で三七〇人。そのエフピコの障害者雇用戦略を支えているのが、ダックス四国を代表とする特例子会社と就労継続支援A型事業所エフピコ愛バック株式会社だ。

株式会社ダックス四国は、エフピコの子会社だが、親会社の意向で生まれただけではない。且田さんが当時のエフピコ社長・小松安弘さん（現、会長）に持ちかけて、いまから二〇年近く前、一九九五年に創業した。A型事業所としては日本初の民間の営利法人が運営する会社、エフピコ愛バックが、二〇〇六年に設立するにあたって中心

な働きをした。且田さんは、エフピコの障害者雇用を牽引する人であり、日本の企業に本当の意味での障害者雇用を広げ続けている人でもあった。

さぞや、福祉への熱い思いが返ってくると思っ込んでインタビューをはじめたら、少し予想外の答えが返ってきた。「うちは、企業です。障害者雇用は福祉事業や社会貢献ではなく、事業です」。

福祉ではない、事業です

現在、ダックス四国をはじめとするエフピコの特例子会社は全国五カ所の工場に障害者を一〇〇人雇用。重度障害者は、雇用換算ではダブルカウント、すなわち、二人分の雇用と見なされるから、雇用率はゆうに一〇〇％を超える。

「障害者だからと言って、親会社からお情けで仕事をもらっているわけではない」。むしろ、エフピコの経営の基幹事業を担っている。容器製造と容器リサイクル事業だ。業務は、主に二つ。一つは、回収された使用済み容器の選別業務。もう一つは、容器を成型加工す